



かながわ考古学財団 考古学入門講座

第5回 ようこそ考古学

ナウマン象に出会った 石器たち

「－3万5千年前の石器製作跡か?－」

(財) かながわ考古学財団 畠中俊明



2008. 1. 18 (金) かながわ県民センター 会議室

① ナウマン象が生きた時代

ナウマン象の化石は、日本列島の至る所で発見されており、県内でも、横浜市、横須賀市、藤沢市、平塚市、二ノ宮町、小田原市などで発見されている。北海道の忠類村（忠類村は、2006年（平成18年）2月6日中川郡幕別町と合併した。）ではおよそ12万年前の化石が発見されている。また、長野県北部の野尻湖周辺からは、ナウマン象やヤベオオツノシカなど絶滅した大型哺乳動物の化石が多数発見されている。因みに氷河期の大型動物として代表的なマンモスは、しばしばシベリアの永久凍土の中から完全な形で発見されて有名だが、日本では北海道でしか発見されていない。

ナウマン象は、およそ40万年前に大陸より陸橋を渡って日本列島へやってきて、およそ2万年前までは生息していたといわれている。日本列島において最も新しいとされているナウマン象化石は、岐阜県郡上郡八幡町（現在は郡上市八幡町）の熊石洞で発見されたもので、化石の放射性炭素年代測定値は $16,720 \pm 880 \text{ B.P.}$ を測る。日本列島においてナウマン象が生息していた終末期は、まさに列島内に人類がやって来た後期旧石器時代（約4万～1万5千年前）に相当する。



ナウマン象も、寒冷地適応した象のため、マンモスのように全身は毛で覆われていたと考えられている。



第1図 ナウマン象骨格（きしわだ自然資料館）と想像模型（野尻湖ナウマンゾウ博物館）

② 当時の環境（野尻湖畔の発掘調査から）



野尻湖においてナウマン象が生息した最上位層は、上部野尻湖層Ⅰ上半部最上部の堆積層（約3万3千年前）と推定されている（野尻湖ほ乳類グループ 2000）。

長野県の野尻湖畔では、ナウマン象の化石とともに石器や骨角器などが出土しており、立が鼻遺跡（1）はナウマン象などの大型哺乳動物を解体したキルサイトと捉えられている。

第3図 ナウマン象の牙とオオツノシカの角（野尻湖ナウマンゾウ博物館蔵）

地層区分	総合柱状図	種層	<i>Pinus koraiensis</i> (Seed) チョウセンゴヨウ(種子)	<i>Larix lepidolepis</i> (Cone) カラマツ(球果)	<i>Taxus diversifolia</i> (Cone) コメダガ(球果)	<i>Picea sp.</i> (Cone) トウヒ属(球果)	<i>Picea sp.</i> (Wing) トウヒ属(翼)	<i>Platanaceae</i> (Cone) マツ科(球果)	<i>Tilia sp.</i> (Fruit) シナノキ属(果実)	<i>Prunus cf. salicina</i> (Endocarp) スモモ(核)	<i>Prunus maximowiczii</i> (Endocarp) ミヤマザクラ(核)	<i>Prunus sp.</i> (Endocarp) サクラ属(核)	<i>Pyrus ussuriensis</i> (Fruit) ミチナカナン(果実)	<i>Acer niliense</i> (Fruit) ナグスリノキ(果実)	<i>Acer diabolicum</i> (Fruit) カシカエデ(果実)	<i>Acer sp.</i> (Fruit) カエデ属(果実)	<i>Vitis sp.</i> (Seed) ブドウ属(種子)	<i>Cornus controversa</i> (Endocarp) ミズキ(核)	<i>Juglans sieboldiana</i> (Nut) オニグルミ(堅果)	<i>Alnus sp.</i> (Inflorescence) ハンノキ属(果序)	<i>Betula ermanii</i> (Bract) ダケカンパノハ(果苞)	<i>Corylus heterophylla</i> (Fruit) ハシバミ(果実)	<i>Corylus sieboldiana</i> (Fruit) ツノハシバミ(果実)	<i>Corylus sp.</i> (Fruit) ハシバミ属(果実)	<i>Fagus crenata</i> (Cupule) ブナ(殻斗)	<i>Quercus sp.</i> (Fruit) コナラ属(果実)	<i>Nelae sp. A-type</i> (Seed) イバハモ属(種子)	<i>Nelae indica</i> (Seed) サガミドリガモ属(種子)	<i>Nelae sp. C-type</i> (Seed) イバハモ属(種子)	<i>Potamogeton sp.</i> (Fruit) ヒルムシロ属(果実)	<i>Cyperaceae</i> (Fruit) カヤツリグサ科(果実)	
J列層																																
上部野尻湖層	Ⅲ																															
	Ⅱ																															
	Ⅰ																															
中部野尻湖層	Ⅲ																															
	Ⅱ																															
	Ⅰ																															
下部野尻湖層	Ba																															
	Bb																															
	Bc																															
	Bd																															
	Al																															
	A2																															
	A1																															
	Ⅲ																															
	下層																															
	中層																															
Ⅱ																																
Ⅰ																																

植物遺体（花粉等）の研究から、上部野尻湖層Ⅰ（約4万～3万年前）の野尻湖周辺では、カラマツやチョウセンゴヨウ、トウヒ属などの亜寒帯針葉樹とスモモ、ハンノキ属、ハシバミなどの落葉広葉樹が産出しており、亜寒帯針葉樹と冷温帯落葉樹の混じる針広混交林が広がっていたと推定されている。

第4図 第13次野尻湖発掘で産出した植物遺体（野尻湖植物グループ 2000）

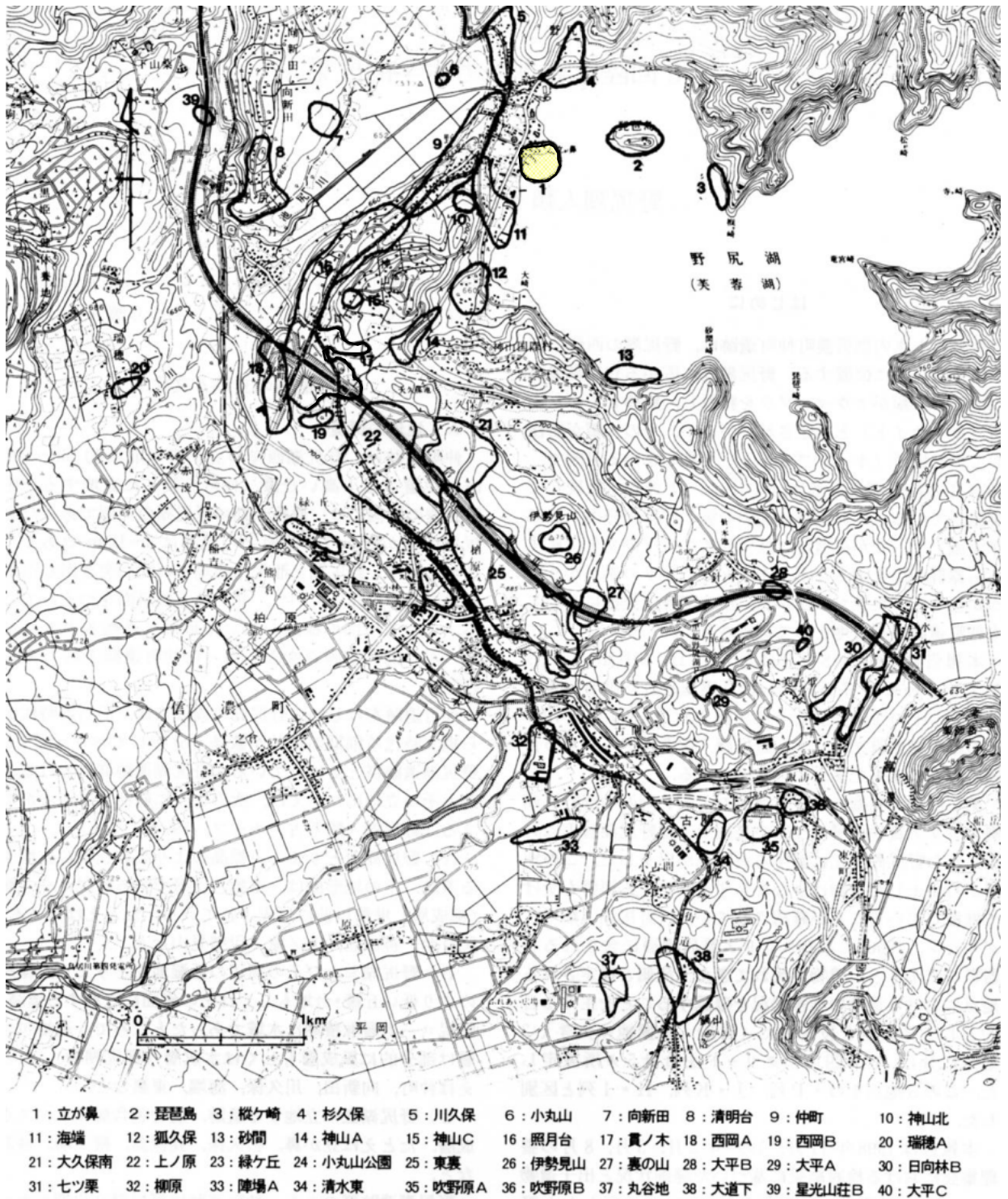


図1 野尻湖周辺の旧石器時代遺跡の分布

第5図 野尻湖周辺の遺跡（野尻湖人類考古グループ 2000）

③ 野尻湖周辺の主な石器群

野尻湖の周辺では、旧石器時代の遺跡が数多く発見されており、仲町遺跡や日向林B遺跡、貫ノ木遺跡などで、局部磨製石斧と呼ばれる刃部を磨いた特徴的な斧形石器が多数発見されている。こ

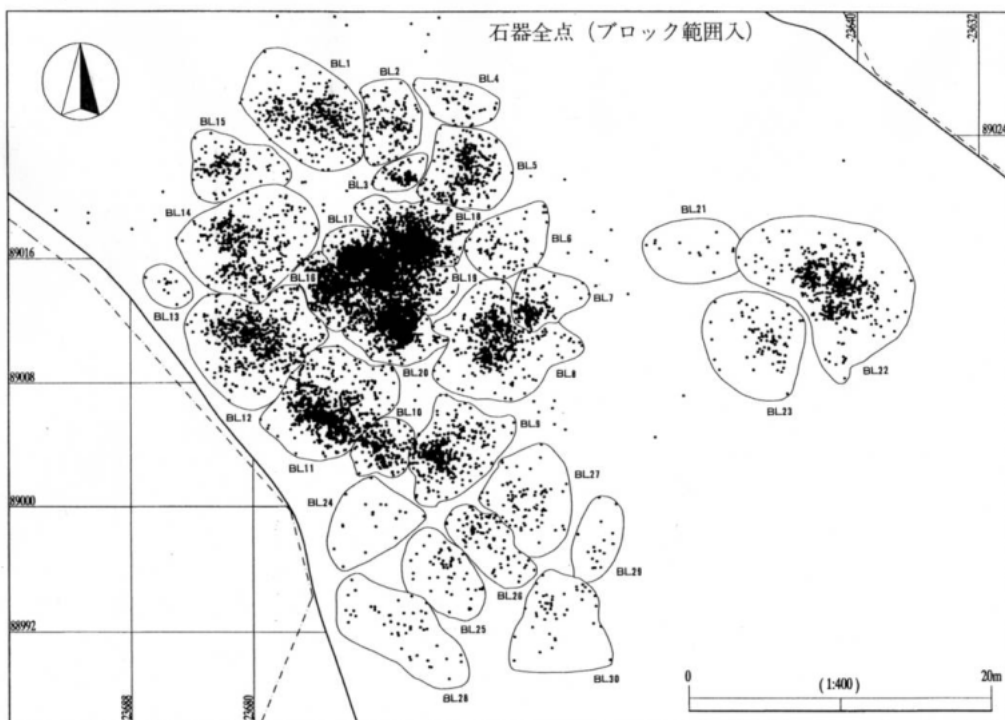
これらの石器群には、しばしば斧の刃部を研いだと思われる砂岩製の砥石が伴っている。その他黒曜石など割れ口の鋭い石材を使用した台形石器（台形様石器）や搔器、削器、錐などが、環状ブロック群と呼ばれる円形の範囲に分布していた。



第6図 日向林B遺跡出土の台形石器

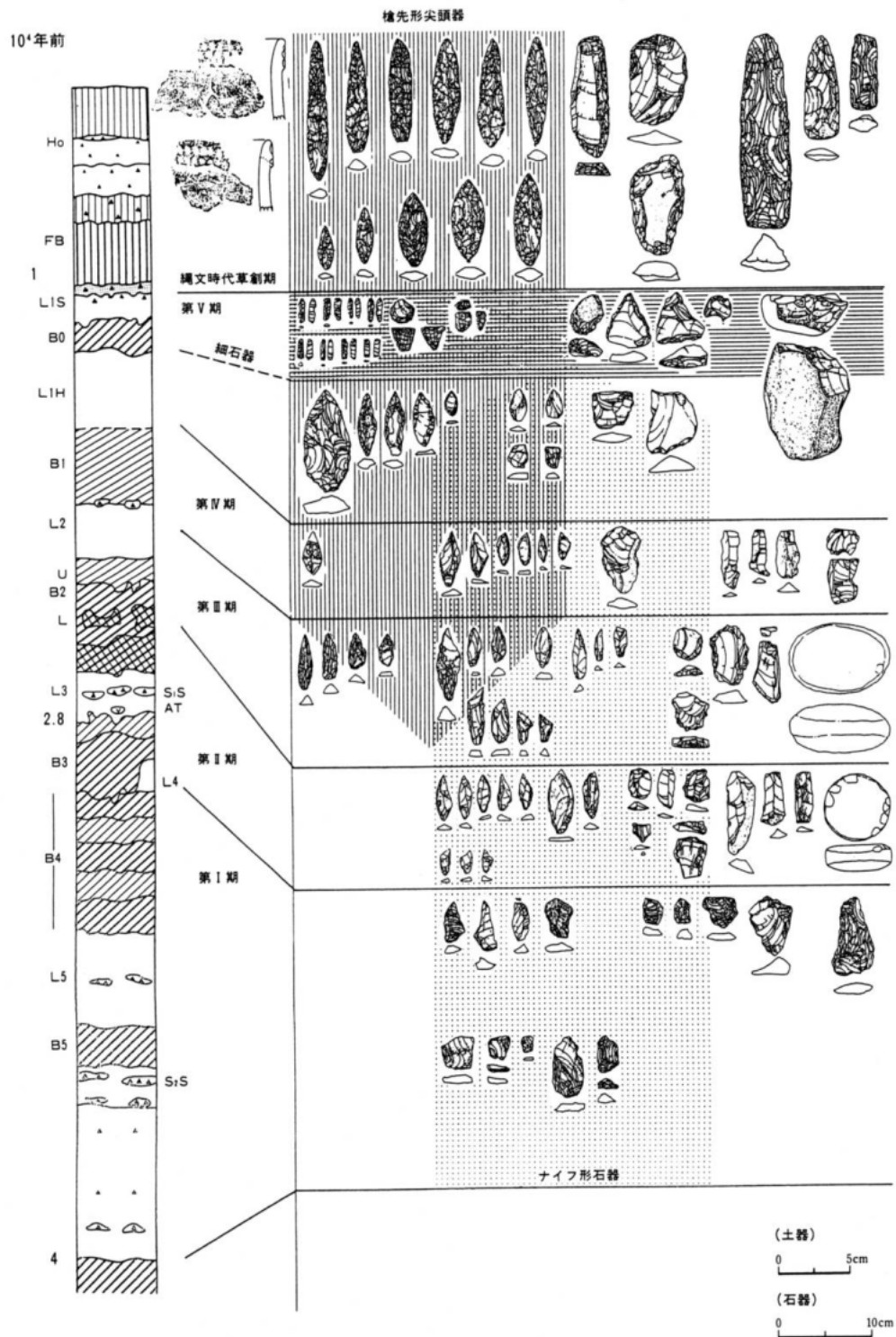


第7図 貫ノ木遺跡の砥石と斧形石器



第8図 日向林B遺跡 日向林I 石器文化石器分布図

④ 神奈川県内最古の石器群と編年



第1-24図 相模野の先土器時代(旧石器時代)編年

第9図 相模野編年図 (矢島國雄 2002: 綾瀬市史より)

旧石器時代の石器群は、関東ローム層と呼ばれる黄褐色土いわゆる「赤土」から出土する。石器の年代は、「その地層が堆積したままの状態であればより下層の遺物は、上層の遺物よりも古い」という『地層累重の法則』に従って新旧を把握する（＝相対年代）。

相模川左岸に広がる相模野台地はローム層が厚く、明るい黄褐色を示す層と暗い暗黄褐色土層が互層となって縞状に堆積している。ローム層は、その大半が富士山を供給源とする火山灰層（テフラ）であり、上から順番にL1S、B0、L1H、B1・・・と呼称され、L6層までを富士山供給の新しいローム層である立川ローム、以下は箱根山や古富士供給の火山灰層である武蔵野ロームと捉えられている。層位的に出土する石器群の顔つきには特徴があり変化が認められる。そうした石器群の層位的な特徴（＝石器文化・インダストリー）によって時期区分することを編年という。神奈川県内における相模野編年では、最も古い時期を第Ⅰ期として、大枠でⅤ期に区分されている。

・神奈川県内最古（相模野第Ⅰ期）の石器群

現在、県内で最も古い石器群は、綾瀬市吉岡遺跡群D区B5層から出土した台形様石器とナイフ状石器の一群である。現時点では、恐らく神奈川県内最古の石器群と考えられる。

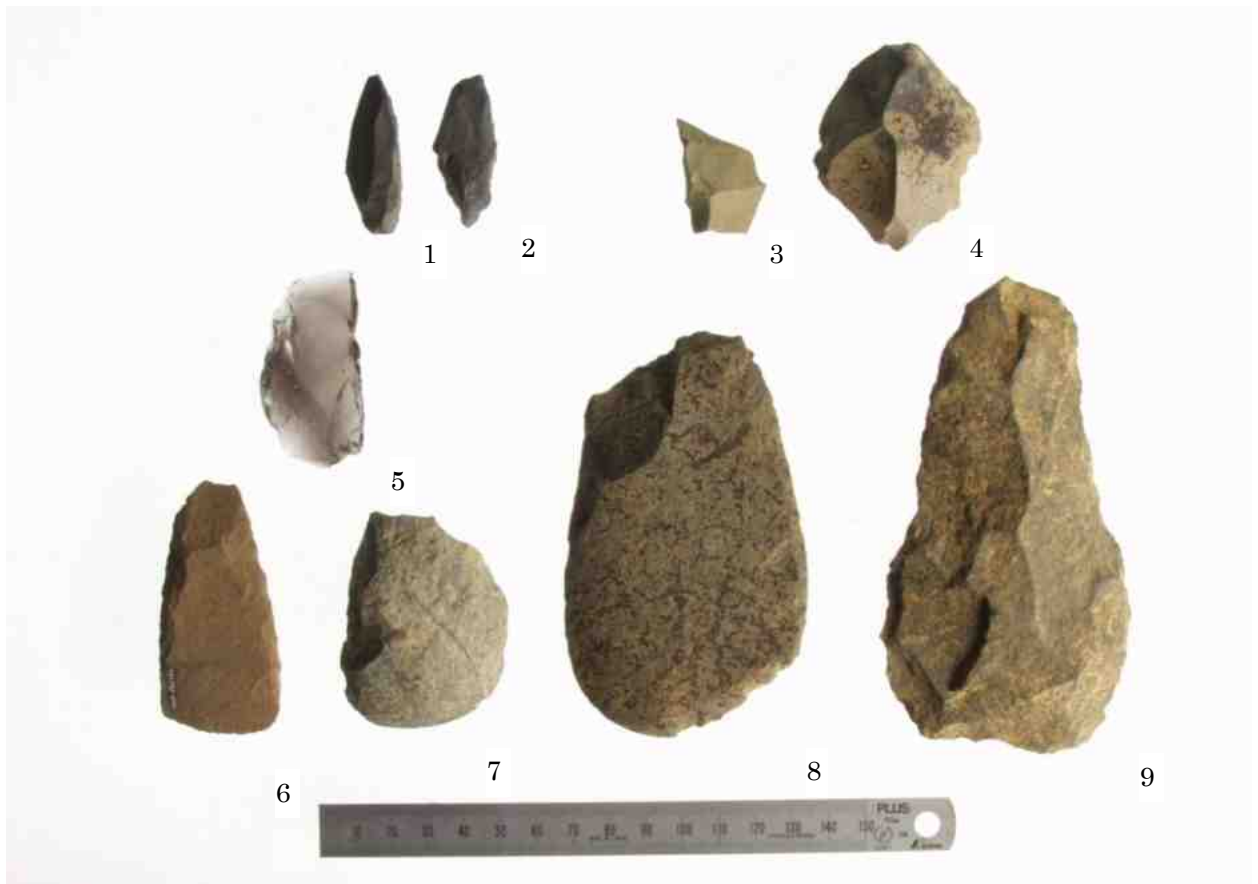
同じく吉岡遺跡群D区のB4層下部からは、水晶製の石器が2点出土しており、そのうち1点はこの時期に特徴的な台形様石器である。また、小形の局部磨製石斧1点が出土している。

その他、相模野第Ⅰ期の石器群としては、大和配水池遺跡L5層、藤沢市No.399遺跡第Ⅱ文化層、同代官山遺跡第Ⅹ・Ⅹ以前文化層、座間市栗原中丸遺跡第Ⅸ文化層、綾瀬市早川天神森遺跡第Ⅷ文化層、同吉岡遺跡群C区B4層中部、相模原市古山遺跡L5層上部、同古淵B遺跡4文化層等が存在するが、何れの石器群も内容はきわめて稀薄なものである。そのため、県内では後続する相模野第Ⅱ期がナイフ形石器の初現と捉えられる中、その線引きは研究者によって見解の分かれるところである。

⑤津久井城跡（馬込地区）で発見された石器群

津久井城跡の調査で発見された最も下位の石器群は、層位的にAT（始良丹沢火山灰）*降灰以前のB4層相当以下に対比され、石器群の内容から相模野編年の第Ⅰ期（約3万5千～3万年前）に相当するものと考えている。最下層の石器群では、局部磨製石斧(7・8)、打製石斧(9)、斧状石器(6)、台形様石器(5)、基部加工のナイフ形石器等が出土している。本石器群においても、水晶製の石器が出土しており、器種組成の面からも吉岡遺跡群D区B4層下部石器群との共通性がみられるものとする。その直上のB3層？相当からは二側縁加工のナイフ形石器(1・2)を伴う相模野第Ⅱ期と捉えられる石器群が発見された。また、AT（始良丹沢火山灰）の直上のB2層相当～L2層相当では、切出形石器(3)や円形搔器(4)が礫群を伴って出土しており、相模野第Ⅲ期の石器群と考えられる。さらにその1m～50cm上層からは相模野第Ⅳ期に比定される石器群が重層的に発見された。その他、70mほど南に離れた地点では、B0層相当から細石刃を伴う相模野第Ⅴ期の石器群が発見された。

*AT（始良丹沢火山灰）：現在の鹿児島県南部の錦江湾（鹿児島湾）付近の始良カルデラを火口とした大噴火により堆積した火山灰で、最近の放射性炭素年代測定の公生では2万6千～2万9千年前に降灰したとされている。



第 10 図 津久井城跡（馬込地区）出土の石器（1・2：B3 層？相当、3・4：B2 層相当、5～9：B4 層相当）

⑥石器の分布から分かること



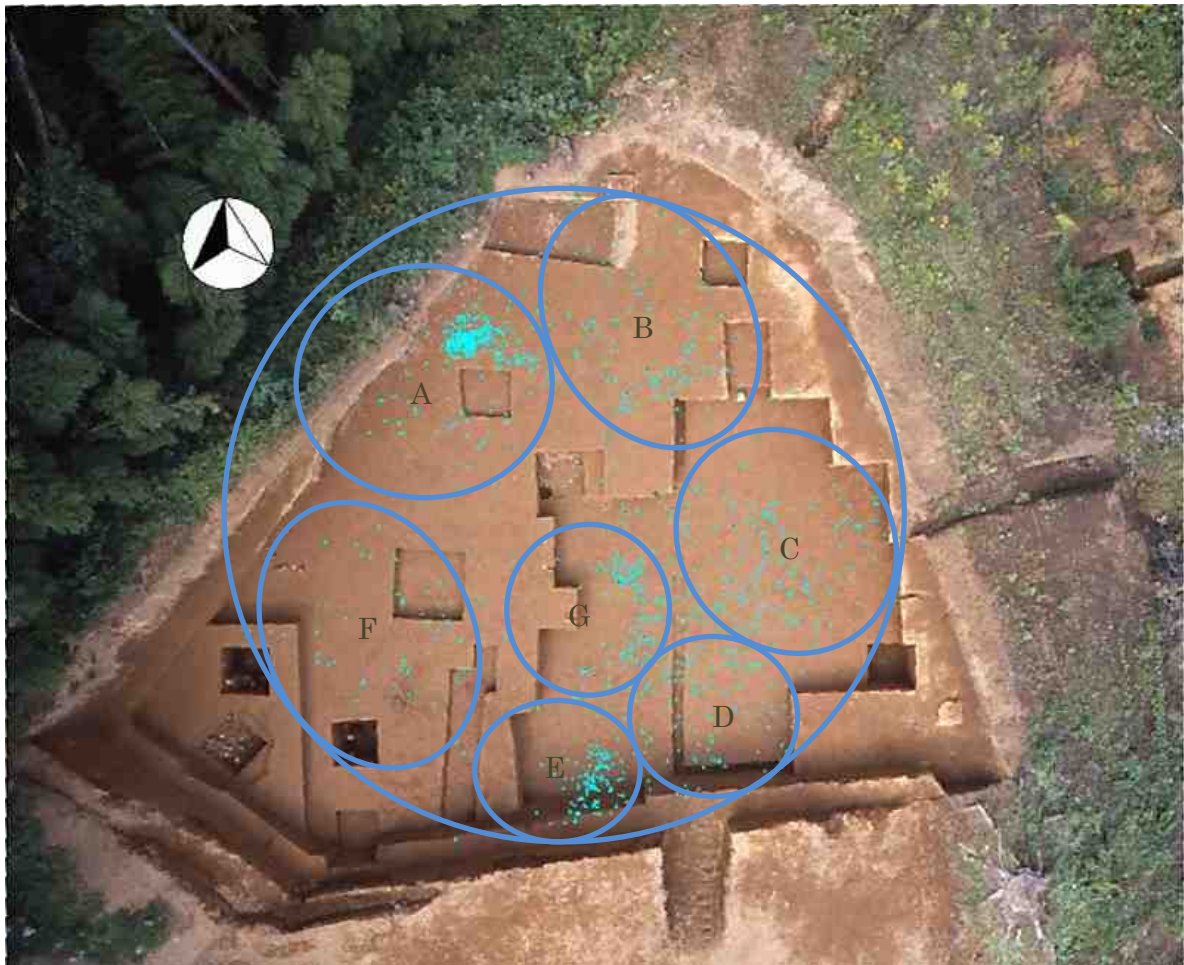
第 11 図 千葉県 池花南遺跡の環状ブロック群とムラの復元図

通常遺跡から出土する石器は、ある程度のまとまりをもって分布することが知られており、そのまとまりを「ブロック」と呼ぶ。このブロック同士は、石器の素材である石材の共有などを通じて有機的なつながりを持つ場合がある。これをユニット**またはブロック群という。

群馬県赤城山麓の下触牛伏遺跡では、ブロックが径約 50mの円形に廻る環状ブロック群であることが初めて確認された。その後、環状ブロック群は関東地方を中心に日本各地で発見されている。そしてその年代は、後期旧石器時代初頭の石斧と台形様石器および基部加工のナイフ形石器等が特徴的にみられる時期であり、その後の石斧を伴わずナイフ形石器が発達する時期以降では、みられないという。

これは、何を意味しているのだろうか？一説では、この時期まだ多く生息していたナウマン象やオオツノシカといった大型哺乳動物を捕らえるために、ある一定期間多くの人々が集まって生活したムラであろうと捉えられている。そして、この時期特徴的に発見される石斧は、これらの大型哺乳動物を解体するために使用された石器であろうと推定されている。実際、野尻湖畔で打ち割られた動物の骨の破片が見つかることから、動物を解体して骨を打ち割り骨髓を食べたのかもしれない。

**ユニットは、しばしばブロックと同義語で使用されている場合がある。



第 12 図 津久井城跡A区の石器分布状況

津久井城の発掘調査においても、石器のまとまり（ブロック）が径約 30mの環状に分布する様子が捉えられた。また、Aブロック（仮称）では、石斧の原材料や剥片、作りかけの石器などが多数出土している。ここで石器を製作し、来るべき大型獣との戦いに備えたのだろうか？

今後整理作業を通じ、石器の母岩別資料分析や接合関係などから、これらブロック同士の有機的なつながりを捉え、環状ブロック群としての把握が可能であるのかどうか、ムラの復元も視野に入れて検討していきたいと思う。

<引用参考文献>

- ・野尻湖地質グループ・野尻湖火山灰グループ 1993
「第 11 次野尻湖発掘地の地質-野尻湖発掘地とその周辺の地質その周辺の地質 その 7」
野尻湖博物館研究報告第 1 号 野尻湖の発掘 6
- ・亀井節夫 1997 「岩宿時代の動物たち」『～人類 500 万年と列島最古の居住者～ヒトの来た道』
- ・旧石器時代プロジェクトチーム 1999 「旧石器時代後半における石器群の諸問題
ーL4 層以下の石器群の様相ー」『研究紀要 4 かながわの考古学』
- ・野尻湖ほ乳類グループ 2000 「野尻湖層産の脊椎動物化石（1996-1999）」
野尻湖ナウマン象博物館研究報告第 8 号 野尻湖の発掘 8
- ・鈴木次郎 2001 「ナイフ形石器文化前半期の様相」『相模野旧石器編年の到達点』
- ・白石浩之 2002 『旧石器時代の社会と文化』
- ・矢島國雄 2002 「先土器時代（旧石器時代）」『綾瀬市史 5』
- ・小菅将夫 2006 『赤城山麓三万年前のムラー下触牛伏遺跡ー』

メモ